夏至と僕

旅人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夏至と僕

【Ｎコード】
Ｎ９０６３Ｘ

【作者名】
旅人

【あらすじ】
夏至の日に現れた蔓の塔。
しばらく月日が経ちその混乱が落ち着いたかと思われたが……

プロローグ（前書き）

拙い文章ですが、見てくれたらありがたいです。

プロローグ

２００１年６月２１日　１５時３５分

確か、夏至の日だったと思う。

大きな揺れが来た。

最初は大きな地震が来たのだと思わった。

しかし、揺れはすぐにおさまり安心して外を見てみると、

信じられないことが起こっていた。

まるで大木のような大きい蔓が何本も絡み合いながら天まで伸びて行く。

そして蔓で塔のようなものを創り上げる。

まるでその蔓で世界を侵食していくようであった。

私はこの時はまだ信じられなくて夢だと思っていた。

夢だと思ったのは私だけではないだろう。

蔓の塔が、そびえ立ってから、数時間後に蔓の塔から光が見えた。

そして蔓の塔から星のようなものが、彗星のように世界中にたく

さん流れていく。

それはとても美しいもので思わず、私はみとれてしまった。

夏至前（1）

俺は苦手な数学の授業でちっともおもしろく無いので俺は窓の向こうに見えている、
空高くそびえ立つ蔓の塔を見る。
昔はあの蔓の塔のが存在することが非日常的な風景に思えたけれど、
蔓の塔も数年もたつと日常の風景にほとんど染まってしまっている。

でも蔓の塔の風景が日常になりつつあるが、そこにはなにが存在するのか分からない俺はあの場所には何があるのかを知りたいなぁ。
なんてことを思っていると、チョークがもの凄い勢いで俺の耳を掠めていく。
「ほら、村上ぼーっと外を見ていないで、この問題を解いてみろ！！」
数学担当で俺のクラスの担任である島田がもの凄い剣幕で言う。
ヤバイと思いつつ、焦るが今どこの問題をやってるのか分からないので答えられるわけないだろと思っていると、
「もう答えなくていい、特別に宿題を倍にしてやるから後で職員室に来い」
少し呆れながら口を開く。「ちょっと待ってくださいよ先生」
俺は抗議しようとしたが、ちょうどチャイムが鳴って、
俺の声が掻き消されたために島田に抗議することが出来なかった。
「よりによってめんどくさい島田に目をつけられるとは恭介も今日はついてないわねぇ」
後ろの席に座っている春が唇を歪ませながら、にやにやと笑う。
「どうでもいいだろ。つーかなんでお前は笑ってるんだよ」
「だって人の小さな不幸を見ると、なんだか面白いんだもの」
にやにやしながら春は答える。
小島春は小学校からの幼なじみなのだが、昔から気がとても強く、

人とズレていているというか、
電波をいつも送受信しているような奴で、中学校の時なんか「夢の中で私は飛べると言われた」と春は言って、
実際に屋上から飛ぼうとして、怪我をした事があるくらいなのだ。
そんなこともあるせいか、こいつに近づくような奴は、そんなに多くないのだ。
「相変わらずお前は性格が悪いというか歪んでるな」
「あたしのどこが歪んでるっていうのよ？」
春はにやにやした顔から唇を尖らせてムッとした顔した。
「……」
俺は何か言い返そうと思ったが、ここで言い返すと、多分口喧嘩になるだろうしそれはめんどくさくなるので、何も言わ無かった。
「まぁ、いいわ。あんたはあたしの手の掌の上で踊ってるだけだから」
さっきのにやにやした顔をしながら言う。
「なんでお前の掌の上で踊らされてるんだよ」
「その時が来たら分かるわよ」
春の言うことは相変わらず意味の分からないことを言うなぁ、なんて思いながら次の授業の準備をする。
「あぁ疲れた」
こってり島田に嫌味を言われながら居残りしていたのがやっと終わったので俺は腕を上に伸ばしながら呟く。
家に帰ろうとして校門を出たところで誰かに見られてるような気がする。
やっぱり俺が家に帰る途中もずっと誰かの視線を感じる。誰かが後ろをついて来てるのか？
そう思った俺は後ろを向くがそこには誰もいない。
気のせいだろうか、春だったら絶対幽霊だって言うだろうなと思った時、後ろの草むらからガサッという音を聞いて、
驚いて思わず後ろを見ると野良猫だった。このさっきから視線のよ

うなものを感じてたが、この猫だったのか。
「なんだよ、驚かすなよお前」
「にゃあ」
もちろん猫なんかには俺の言葉が分かるはずがなく、懐きやすい猫なのか俺のほうに飛びついてくる。
「残念だけどさ、俺の家は団地だから猫は飼えないんだ。ごめんな」
俺は猫に話しかけるように一人で呟く。
今度なんかエサでも持って来てやろうかなと思いながら家に帰る。

「校長、島田ですが、入ってもよろしいでしょうか」
島田は校長室をノックする。
「ああ、島田君か入ってきてくれ」
校長は椅子に座りながら、書類に目を通していた。
「失礼します。あの用事というのは？」
「君もあの塔のことぐらいは知ってるだろう？」
校長は窓の向こうを見て、蔓の塔がある方向を指差した。
「もちろんあの塔があるのを知らない人なんていませんよ。」
島田は何故校長がいきなりこんなこと言うのか分からないのか、首を傾げながら答える。
「では、あそこに人が行ったことがあるのは聞いたことは？」
「いや聞いたことなんて無いですし、だいたい政府はあんなところに近づけやしないと言ってたじゃないですか。僕も暇じゃないんで、これ以上関係無い話しをするなら帰りますよ。」
島田は少し呆れながら校長室を出て行こうとした瞬間
「では今までの話しがこの学校と関係あると言ったらどうする？」
今まで窓の向こうを見ていた校長は厳しい表情で島田に再び目をやる。

夏至前（2）

俺は今苦手な数学の授業を受けている。
しかしちっともおもしろくないので、窓の向こうに見える、空高くそびえ立つ蔓の塔を見る。
昔はあの蔓の塔のが存在することが非日常的な風景に思えたけれど、蔓の塔も数年もたつと日常の風景にほとんど染まってしまっている。

現在は蔓の塔の風景が日常になりつつあるが、
そこにはなにが存在するのか分からないあの場所には何があるのかを知りたい。
なんてことを思っていると、チョークがもの凄い勢いで俺の耳を掠めていく。
「ほら、村上ぼーっと外を見ていないで、この問題を解いてみろ！！」
数学担当で俺のクラスの担任である島田がもの凄い剣幕で言う。
ヤバイと思い、慌てて教科書を見るが、今どこの問題をやってるのか分からないので答えられるわけもはずもない。
「もう答えなくていい、特別に宿題を倍にしてやるから後で職員室に来い」
少し呆れながら島田は口を開く。
「ちょっと待ってくださいよ先生」
抗議しようとしたが、ちょうどチャイムが鳴って俺の声が掻き消されたために島田に抗議することが出来なかった。
「よりによってめんどくさい島田に目をつけられるとは恭介も今日はついてないわねぇ」
後ろの席に座っている春が唇を歪ませながら、にやにやと笑う。
「どうでもいいだろ。つーかなんでお前は笑ってるんだよ」
「だって人の小さな不幸を見ると、なんだか面白いんだもの」

にやにやしながら春は答える。
小島春は小学校からの幼なじみなのだが、昔から気がとても強く、人とズレていているというか、電波をいつも受信しているような奴で、中学校の時なんか「夢の中で私は飛べると言われた」と春は言って、実際に屋上から飛ぼうとして、怪我をした事があるくらいなのだ。
そんなこともあるせいか、こいつに近づくような奴は、そんなに多くないのだ。
「相変わらずお前は性格が悪いというか歪んでるな」
「あたしのどこが歪んでるっていうのよ？」
春はにやにやした顔から唇を尖らせてムッとした顔した。
「……」
何か言い返そうと思ったが、ここで言い返すと多分口喧嘩になるだろうし、
後々めんどくさくなるので何も言わなかった。
「まぁ、いいわ。あんたはあたしの手の掌の上で踊ってるだけだから」
さっきのにやにやした顔をしながら言う。
「なんでお前の掌の上で踊らされてるんだよ」
「その時が来たら分かるわよ」
春の言うことは相変わらず意味の分からないことを言うなぁ、なんて思いながら次の授業の準備をする。
「あぁ疲れた」
こってり島田に嫌味を言われながら居残りしていたのがやっと終わったので俺は腕を上に伸ばしながら呟く。
家に帰ろうとして校門を出たところで誰かに見られてるような気がする。
やっぱり俺が家に帰る途中もずっと誰かの視線を感じる。誰かが後ろをついて来てるのか？
そう思った俺は後ろを向くがそこには誰もいない。

気のせいだろうか、春だったら絶対幽霊だって言うだろうなと思った時、後ろの草むらからガサッという音を聞いて、驚いて思わず後ろを見ると野良猫だった。このさっきから視線のようなものを感じてたが、この猫だったのか。

「なんだよ、驚かすなよお前」

「にゃあ」

もちろん猫なんかには俺の言葉が分かるはずがなく、懐きやすい猫なのか俺のほうに飛びついてくる。

「残念だけどさ、俺の家は団地だから猫は飼えないんだ」

俺は猫に話しかけるように一人で呟く。

今度なんかエサでも持って来てやろうかなと思いながら家に帰る。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9063x/

夏至と僕

2011年11月17日18時10分発行